

取材記録

2023.6発行

密着取材！

あらやちやぶちやぶ大学

コロナ禍による三年の中止を経て、今年度再開された新屋鹿嶋まつり。地域の方々が心待ちにしていたまつりの再開を、同じように心待ちにしていた団体がある。秋田公立美術大学の学生が中心の団体「あらやちやぶちやぶ大学（通称ちやぶ大）」だ。

秋田公立美術大学の設立当初から活動を開始しているこの団体は、地域と濃密な交流を行う、パワーに満ちた団体だ。コロナ禍以前から、鹿嶋まつりの山車制作に携わってきた。

今回、ちやぶ大の活動の一環として、現在の学長（代表）である長谷川由美さんが関わる十條団地子供会での活動への取材に協力いただいた。

鹿嶋まつりの一週間前、十條団地を訪れると、山車の制作準備をしていた。今年度は、近年話題を呼んだ少年漫画を題材に選んだとのこと。

この子供会におけるちやぶ大の担当は、山車に乗せるパネル制作に使用するペンキの配合とパネルの仕上げだ。

取材当日は色彩をパネル用に調合し、子供たちが制作する際に使いやすいよう小分けにする作業を行っていた。長谷川さんに伺うと「パネルの広い部分は子供たちが担当しますが、細かい部分は美大の学生が作業します。」と話す。十條町内会副会長の中島さんにも取材したところ「ちやぶ大は美大のサークルで、美術に長けているから、仕上げをお願いできて、非常に助かっている。子供たちのサポートとして参加してもらえているので、技術、人手の両面で本当にありがたい。今の新屋にはなくてはならない存在だ」と話してくれた。



↑「あらやちやぶちやぶ大学」長谷川学長(左)と十條町内会 中島副会長(右)
これまでの鹿嶋まつりのアルバムと共に撮影



↑鹿嶋祭当日の十條団地子供会の山車

鹿嶋まつりには、ちやぶ大のみならず、サークル以外の方も含め、約三〇名の学生が集り、各町内に数人ずつ派遣され活動しており、祭り当日も取材をしたところ、自身が関わった町内の一員として、山車を曳いたり、太鼓を叩いたり、祭りに参加していた。

祭り当日、長谷川さんは「ようやく鹿嶋まつりが開催されてとても嬉しい」と笑みをこぼす一方、「どの地域も高齢化が進んでいて、今後の継承には、若い人が必要だから、どうかしていかないと」とのお話をしていた。

ちやぶ大への取材を通し、地域との関わりが非常に強いことを実感し、驚かされた。「新屋に根付く」この言葉がこれほど似合う団体もないだろう。学生と住民をつなぐ地域に欠かせない団体として今後も活動が続けられることを願ってやまない。

待ちに待った鹿嶋祭



↑ 鹿嶋祭当日

子供たちが山車を曳き、大人はそのサポート
山車は町内ごとに特徴が違う

祭の開始とともに打ち上げられる花火。
沿道で山車を待つ人々が集まりだし、
徐々に大きくなる太鼓や笛の音。
そして町内に響き渡る鹿嶋唄。
「しよしよしよ
鹿嶋のおくりしよ
しよしよしよ」
この唄声に気分は高揚する。

活動に関わる学生の声

実際に十條団地で生まれ育ち、今年度は美大生として鹿嶋祭に参加した学生は「子供の頃は、山車の制作に関わる機会があまりなく、太鼓を叩いたりしていたけど、美大生として参加してみても、大人になってからのの方が、より楽しく感じる」と語った。

大学進学を機に秋田にきた群馬出身のちやぷ大生は「地域と関われる行事の数が群馬とは桁違いに多くて驚いた。色々な活動に参加できてすごく楽しい休日も色々遠出してみたりして、すごく充実しています。今は秋田弁を勉強中です。水路掃除も楽しみ！早くやりたい」と嬉しそうに話してくれた。



↑ 鹿嶋人形

山車に乗せ、町内を練り歩く
かつては雄物川に無病息災の
願いを込めて流されていた



↑ 山車制作の様子

ユキヒョウとウサギ 種族を超えた組み合わせで愛を表現
(後ろにはオモリンとズーミンの姿も。)

昨年度のちやぷ大学長の大内さんは「入学後ずっと参加したかった鹿嶋祭に、四年生での初参加で感慨もひとしおです。町内の山車制作を担当し、住民のみなさんとともに試行錯誤中です。大森山動物園のお膝元ということで、町内会のオリジナルキャラクター、オモリンの妹(?)ズーミンも作成しました」
また、来年の鹿嶋祭に向け意気込みを話す学生や三つの町内を周り、複数の山車制作に携わったという学生もいた。どの学生も楽しそうに活動を語る姿が印象的だった。

(市民活動支援アドバイザー 出雲淑恵)